

十年ほど前のことである。インターネットの最新プロトコルであったゴーファー（Gopher）サーバが国立がんセンターで動いているという情報を誰かが仕入れてきた。筆者らは、14,400bps のモデムを使ってパソコン通信にアクセスし、そこで提供されていたゲートウェイを介して接続を試みた。かなりの試行錯誤が必要だったが、とうとうゴーファーのメニュー画面がパソコン通信の粗末な文字端末の上に表示されたときには思わず胸がときめいた。

ワールドワイドウェブ（WWW）のことを筆者が知る数ヶ月前のことだ。その後ウェブは天に昇り、ゴーファーは地に落ちた。

ところが、わずかに十年前には、どちらも新奇で一般にはなじみのない技術（だいいちプロトコルってなんだ？）に過ぎなかったのだ。当時インターネットの参考書には、ネットニュース（Usenet）、メーリングリスト（Listserv）、FTP にテルネットというのが相場で、今手元にあるラクウェイとライアーの『Internet ビギナーズガイド』（トッパン、1993）にも、ゴーファーとウェブを合せても一頁に満たない短い記述しかない。しかもこれがなんのことだかさっぱり要領を得ず、著者自身どちらのプロトコルもあまり理解していなかったことをうかがわせる。

これがわずかに十年前である。

だから、可能性としてはゴーファーだけが生き残るか共存するということもありえたらう（現にFTPサーバはウェブと共存している）。しかしそうはならなかった。というのは、まもなくゴーファーは有料化され、そのためインターネットコミュニティからそっぽを向かれてあえなく消えてしまったからだ。

ことほどさようにインターネットには有償のものに対する根強い抵抗がある、というのは事実だ。医学文献の検索で有名な PubMed も当初は一

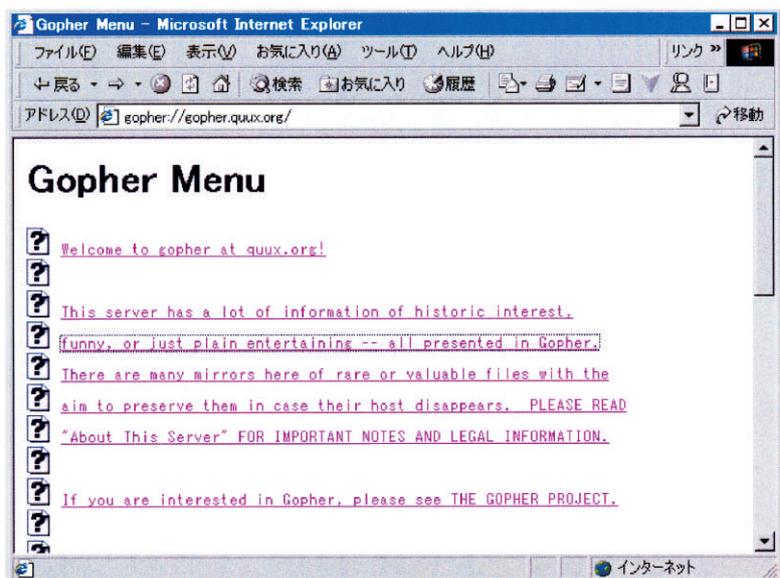
部を除けば有料だったのが、現在では無料になっている（これは政策的なものかもしれないが）。

ただ、こうしたインターネット魂とでもいうものが、インターネットの強みでもあり活性化の原動力になっていることに間違いはないのだが、ひとは人の心だけで生きているわけではない。残念なことに（かどうかはともかく）パンも必要なのである。

黎明期はともかく、現在の学術雑誌サイトは一論文いくらで論文の切り売りをしているし、国立の PubMed 以外に情報を無償で提供している二次文献誌は（恐らく）ないと思う。やはり情報は決してタダではないのである。

結局、インターネット魂はどうあれ、これが現実というものであろう。ゴーファー失速の最大の理由は、有料化ではなく、単に（有料化が）早すぎたということなのだ。もちろん技術的な理由も多々あるのだが、商売という意味では、結局これにつきるといえる気がする（とはいっても今あれがでて誰も見向きもしないでしょうけれど）。

それにしても日本の文献検索はもう少し安くないでしょうか。



Gopherは絶滅寸前だが、まだ絶滅してしまっただけではない。今でもウェブブラウザで見られるGopherサイトのトップメニューの例。